

サリドマイド児等両上肢障害児について

分担研究者 手塚直樹

(身体障害者雇用促進協会)

1. 研究の目的と経緯

この研究は、サリドマイド児等両上肢障害児の日常生活・教育・職業等について、その実態と課題をとらえ、サリドマイド児等両上肢障害児を中心とした身体障害児に対し、指導、援助の具体的方策を研究することを目的としている。

この研究は、サリドマイド児等両上肢障害児をもつ親は将来の職業について大きな不安をもち、「サリドマイド児等両上肢障害児が就業できる適応職種、可能職種は何であるのか」「どのような職業適性を身につけておけば就業が可能なのか」といった要求に応えるために、その適応職種をみつけることを第一の目標として研究がすすめられた。

この適応職種をさぐる研究は、主に四つの側面から行なわれた。第1は、身体障害者の就業職種実態の調査分析、第2は、職種の分析から障害別適応職種をみつけ出すこと。第3は、身体障害者の機能を技能テスト等により分析して適応職種をさぐっていく方法、第4は、サリドマイド児等両上肢障害児に最も類似していると思われる両上肢障害者（主に両上肢切断者）の就業実態を個別的に調査分析し、その実態と課題を究明していく方法である。しかし、第1から第3までの方法は、現実としては、ほとんどみるべき成果をあげることができなかった。しかしながら、第4の両上肢障害者の就業実態を個別的に調査分析する研究方法は、かなりの成果をおさめることができた。

特に、その検討過程において、就業を成り

立たせる要件の非常に重要なこととして、日常生活動作の成就度が密接に関連していることがわかったため、次年度の研究は、「*ASLチェックリスト」を独自に開発して調査する等、サリドマイド児等両上肢障害児の日常生活の実態と課題について集中的に研究を行なった。（*ASL=activities of school life 学校生活動作）

また、サリドマイド児等両上肢障害児は、当面の最も重要な課題として中学進学、高校進学の問題をもつことから、大学教育を含めた進学問題について、かなり具体的に調査・研究をすすめた。

更に、サリドマイド児等両上肢障害児においては、日常生活における衣服や学習上の器具・備品の改善が必要となっているので、そうした観点からの研究を実施してきた。

2. 今年度の研究目標

今年度の調査、研究は、昨年度までの研究結果をふまえた上で、主に次の4点に焦点をあてて行なった。

第1は、サリドマイド児等両上肢障害児の適応職種に関して、類似的状態にあると思われる両上肢切断者の就業実態調査を再度実施し、従来の結果に加えて更にそれを深めていく。

第2は、高校進学の実態を調査し、当面の最も重要な課題となっている上級学校進学の課題を更に検討する。

第3は、衣服、特に最も困難を伴う雨の日の衣服や雨具について調査・研究をする。

第4は、サリドマイド児等両上肢障害児も

思春期に入って、心理的課題も多く、また父母の心配も少なくないことから、思春期の課題をとりあげ研究する。

3. 研究結果の概要

今年度の研究目標における調査・研究結果の概要は次のとおりである。

(1) 両上肢切断者の就労実態調査・研究
今回の調査は訪問面接によって行なわれた。調査対象は21名で、そのうち就労している者17名について詳細に分析した。

① 就労の型からみると次のようである。
授産所 5名(月収3,000円～80,000円)
復職 4名(月収130,000円～150,000円)
再就職又は新規就職 4名

(月収70,000円～130,000円)

自営 4名(ほとんど経済的自立困難)

②職種についてみると次のようである。

事務的職種(9名)、専門的技術的職種(3名)、単純労働の職種(2名)、販売の職種(1名)、管理的職種(1名)、技能工(1名)

③就業を成り立たせている要因として対象者があげているものをみると、次のような順になっている。

義手をつかって仕事ができる(9名)

技術、知識がある(6名)

周囲の人の協力、理解がある(6名)

努力して仕事をしている(3名)

④日常生活動作については、ADL調査項目10項目中8項目において80%以上の自立を得ている。残り2項目は、顔を洗う(71%)、体を洗う(10%)であり、日常生活動作の成率はきわめて高い。

⑤調査対象となった両上肢切断者は、事故、労災、疾病等、後天的障害者が大部分なので、先天的障害者としてのサリドマイド児等両上肢障害児と質的に異なると思われる点もあるが、その共通性も少なくない。

特に、サリドマイド児等両上肢障害児の将来の職業を考えていくうえで、前回の調査結

果とも合わせて、次のような点が重要であると思われる。

イ. 切断者の義手の効果は大きい。しかしサリドマイド児等両上肢障害児は、将来とも義手を使用することはほとんど考えられないので、この点の相違を十分留意する必要がある。

ロ. 日常生活動作の成率は就業の成立と密接な関連にあることが再度認識されたので、日常生活動作の可能性を最大限に開発し、完成する必要がある。

ハ. 残された機能を、あらゆる場面であらゆる方法で利用していることがよくわかった。サリドマイド児等両上肢障害児にあっては足の利用については十分訓練する必要がある。

ニ. 職場における人間関係の問題は大きく、それをスムーズにさせる社会性、人間性が強く求められていることがわかった。サリドマイド児等両上肢障害児にあっては、その人間性、社会性の開発には十分意をそそぐ必要があると思われた。

⑥サリドマイド児等両上肢障害児の適応職種及び職業性を考えていくとき、以上のことから、就業するうえで必要とする諸能力は、身体的機能の条件も勿論重要なことではあるが、その前提となる人間性、社会性、及び知識、意欲、体力、等がきわめて重要であることが再度確認された。

また、サリドマイド児等両上肢障害児の大部分は、一般の就業コースの中に将来の就職先を求めても可能であることが推測された。したがって、特定の就業の場の設定——例えばサリドマイド児等両上肢障害児専用の就業施設等については原則的には必要がないものと思われる。

(2) 高校進学に関する調査・研究

全国のサリドマイド児のうち、調査対象(いしずえ調査)226名中、51年4月に17名が高校に進学した。52年3月の中学卒業予定者数は67名、53年3月は108名とサリドマイ

ド児の高校進学はピークを迎える。

サリドマイド児の中学進学については、特に東京都にあっては、本研究委員会が具体的に指示・示唆をしたこともあって、ほとんどトラブルもなく中学進学を終えた。

高校進学については、義務教育の中学とは違った面もあり、問題もかなり大きいのが現在までのところ、大きなトラブルはないようである。

高校進学に関する調査・研究は前年までに一部これを実施してきたが、今年度の調査・研究結果の概要は次のとおりである。

① 中学における評価において、両上肢の障害の影響が顕著にあらわれる実技を伴う学科（美術・家庭・体育）の学業成績は、個人によってバラツキがあり、一概に低いとは云えない傾向にある。

② 保護者に対する調査から、高校入試の内申書には、評価が低くなった根拠（それが上肢障害によるものであれば）を、ありのままに調査書に書き添えて欲しい、という要望がある。

③ 高校入試に関して、さまざまな要望が出されているが、根拠となる実証的データ（書写速度、消しゴムの使用等）が伴わないことが多く、対策が具体化しない傾向にある。

④ 教育委員会の検討で、本人に適した机の持ち込み、トイレの介助等に配慮を加える必要性を指摘しているところもある。

⑤ 高校入試に関しては前年度の報告でも指摘したところであるが、それは個人の思惑や事情を超えて、厳然と存在しており、その競争に勝ち抜くことが要求される。サリドマイド児の高校進学問題は、特殊なものではなく一般的なものとして、そして、各個別の事情は特別なものとして個々に対応すべきで、それらを総括的、共通的にとらえていくことは正しいことではないと思われる。

現行の入試制度は、いわゆる「学力」がすべてに優先されており、サリドマイドによる

上肢障害も、その限りにおいて副次的な要因でしかない。従って、何としても「学力」を身につけることが要請される。

こうした事情を十分認識したうえで、サリドマイド児等両上肢障害児のうち、聴力障害を伴うもの、内部障害を伴うもの及び上肢障害児のうちアメリカとホコメリアについては、個々の状況に即して事前に配慮することが必要であるが、一般的にみて、サリドマイド児ということで一律に特別の配慮を加える必要性は、必ずしもないものと思われる。

また、高校進学、大学進学等について、特別の配慮をする必要性のある少数を除いて、大部分のサリドマイド児等両上肢障害児は、一般の普通のコースをすすむことが可能であると思われる。

(3) 衣服——特に雨の日に関する研究

サリドマイド児等両上肢障害児は、両手に障害をもっているため衣服の着脱等に困難を伴うが、特に通学の問題とも関連して、雨具の使用等「雨の日」の生活行動にいろいろと問題がある。

サリドマイド児等両上肢障害児の衣服に関する一般的調査・研究は従前から行なっていたが、今回は特に「雨の日」に焦点をあてて調査・研究を行なったので、その結果の概要を記しておきたい。

① アンケート調査の実施

「雨の日について」のアンケート調査を実施した。

回収数…63名

他人の手を借りる者…24名

他人の手を借りなくすむ者…39名

イ. どちらか片方の腕、手指がある程度使えれば、障害ほとんど問題ない。

両上肢の場合でも、母指欠損、手指のみの欠損であれば問題ない。

ロ. 雨の日に問題になる人は、「アメリーに近い人」「腕があっても両上肢の機能不全の人」「両ひじ、手指関節不能の人」

ハ。傘に関し次のような希望が出されていた。「ワンタッチで開閉でき、折りたたみ可能で軽いもの」「風の強い日でも使える傘—例えば和傘のように半びらきで使用可能なもの」「力をあまり要しないで開閉できるもの」「ワンタッチで肩又は腰ベルトに装着できるもの」などである。

② レインコートの必要性と試作

手助けを必要とするグループに入っている者のうち、「傘を使いこなせない人」「手指の方の弱い人」には、着脱がらくで、本人にとって使い易い留め具のついたレインハットつき、又はフードつきのレインコートが適しているといえる。

留め具は、マジックテープかボタン又はファスナーで、首に近いところに留め具のないもの。

また、雨の上った場合のことを考えると、素材は軽くて簡単に処理できるもの。

そして、荷物や持ちもののぬれない工夫のされたもの。

こうした要件をみたしてくれるデザインのレインコートがあり、それが日常生活に定着すれば雨の日の不自由さが軽減されると思う。

しかし、中学生の間は標準服という名がついているが、高校生になると制服という形でせまってくるので、通学服、レインコートとも問題が出てくるものと思われる。

今回の調査を通して、サリドマイド児童両上肢障害児の衣服については、もっと詳細に分析・検討し、その個々に対して具体的対策をたてていくことの必要性を痛感した。サリドマイド児等両上肢障害児にとって、進学問題にとっても、就職問題にとっても、その根底の最も大きなひとつの要件となる日常生活動作についてみたとき、衣服の問題は大へんに重要である。

「雨の日について」というテーマのもとにこの衣服の問題をより具体的にとりあげ、調査・研究したが、その問題の重要性によ

て、レインコートの試作など、具体的に検討をすすめていく必要がある。そのための準備を可能な範囲内で試みている。

4. 思春期の心理的な面の助言

サリドマイド児等両上肢障害児も、最年長は高校3年生になり、思春期に入っているが、心理的な面からの助言の必要性から、今回は特に、社会で活躍し、結婚し、子どものいる3人の両上肢障害者にきてもらって、その体験を通して、後輩への具体的助言を収録した。

特に、先輩としてのこれらの人々は、後輩の身体障害児に対して、1人の人間として、社会人として、きびしく対処し、最大の努力をして堂々と生きていくことを強く望んでいた。

サリドマイド児等両上肢障害児の思春期における諸問題は、その予測を含めて、父母の新たな心配のことがらであるが、それらに対する具体的助言のひとつの方法として、今年度は座談会におけるアドバイスの収録というかたちで行なった。

5. まとめ

サリドマイド児等両上肢障害児を中心とした身体障害児の日常生活・教育・職業等について、4年間にわたって、いろいろの観点から調査・研究してきた。

本研究の各々の調査・研究結果をみると、あまりにもとらえ方が広範で焦点がないように見られがちであるが、現在、わが国にいる、百人のサリドマイド児、そのうちの大部分を占める両上肢障害児に対して、成長過程における、その各々に対して具体的に適切な助言や指導をしていくには、その研究テーマの設定も広範囲にならざるを得ない。

4年間にわたる調査・研究結果は、実施した調査の分析・検討結果を始めとして、各々の研究協力者による個別的、総体的成果も尠大なものになってきているので、これらを整

理し，まとめ，更に研究を深めていきたい。

■研究協力者

大 漉 憲 一	西 村 晋 二
樫 木 八重子	野 村 歆
加 藤 博 臣	原 田 豊 治
河 合 久 治	星 野 昌 哉
渋 沢 久	三ツ木 任 一
沢 治 子	

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1. 研究の目的と経緯

この研究は、サリドマイド児等両上肢障害児の日常生活・教育・職業等について、その実態と課題をとらえ、サリドマイド児等両上肢障害児を中心とした身体障害児に対し、指導、援助の具体的方策を研究することを目的としている。